J. ヴィトマン：エア

クラリネット奏者・指揮者としても活動するイェルク・ヴィトマンは、ドイツの現代音楽作曲家。ホルン独奏のための本曲は 2005 年、ARD ミュンヘン国際音楽コンクールの課題曲として作曲された。エア（エール）には、文字通り音の振動を伝える「空気」、そして音楽では伝統的に「歌謡」「メロディ」といった意味がある。

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第 26 番《告別》

ベートーヴェンの 32 曲のピアノ・ソナタの多くには副題が付けられているが、作曲者自身が命名したのは第 8 番《悲愴》、第 13 番《幻想曲風》、そしてこの《告別》の 3 曲のみ。ベートーヴェンの弟子で、パトロンでもあったルドルフ大公がナポレオン戦争を避けてウィーンを去った 1809 年に書かれ、別れを惜しんだベートーヴェンがこのソナタの第 1 楽章に「告別」と書いたのだ。序奏つきのソナタで、冒頭主題 3 つの下行音型には "Lebewohl (さようなら)" の言葉が記されている。寂しく、哀しげな第 2 楽章は「不在」の題を持つ。切れ目なく奏される第 3 楽章は「再会」と名付けられ、喜びと感動を表すように急速な音型が終始鍵盤を駆け巡る。

G. リゲティ：ホルン三重奏曲《ブラームスへのオマージュ》

ヴァイオリン、ホルン、ピアノのための本曲は、1982 年の作。傑作として名高いブラームスのホルン三重奏曲を意識したオマージュ作品である。とはいえ、原作とはだいぶ様相が異なり、十二音技法を用いた高難度の曲となっている。全 4 楽章構成で最終楽章には「ラメント（哀歌）」が置かれ、ヴァイオリンの哀切な響きがブラームスのホルン三重奏曲にある「アダージョ・メスト」を想起させる。

G. クルターグ：《サイン、ゲームとメッセージ》より J.S.B. へのオマージュ

ハンガリーのジェルジュ・クルターグは 100 歳近い今なお現役の作曲家・ピアニスト。本曲は、50 年以上にわたって書き継がれている様々な楽器のための作品集《サイン、ゲームとメッセージ》に含まれる J.S. バッハに捧げられた 1 分強の掌篇。

J.S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 3 番より ルール

J.S. バッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ》（全 3 曲）は 1720 年以前、ケーテン宮廷楽長時代前半の所産とされる。パルティータ第 3 番には軽快で明るい舞曲が並び、第 2 楽章ルールでは抒情的な旋律が美しく歌う。

ブラームス：ホルン三重奏曲

作曲当時はすでにバルブ付きの近代ホルンが主流であったが、ブラームスは旧式のナチュラル・ホルンに愛着を寄せていた。少年の頃、母に吹いて聴かせていたという挿話もあり、本作もナチュラル・ホルンの懐古的で柔らかな響きを念頭に書かれている。1865 年 5 月、広大なシュヴァルツヴァルト（黒い森）に隣接した保養地バーデン＝バーデンで書き上げられた。同年 2 月には母が他界しており、深い憂愁に閉ざされた第 3 楽章は亡母への哀悼だろうか、アダージョ・メスト（ゆるやかに、悲しみにみちて）との指示がある。